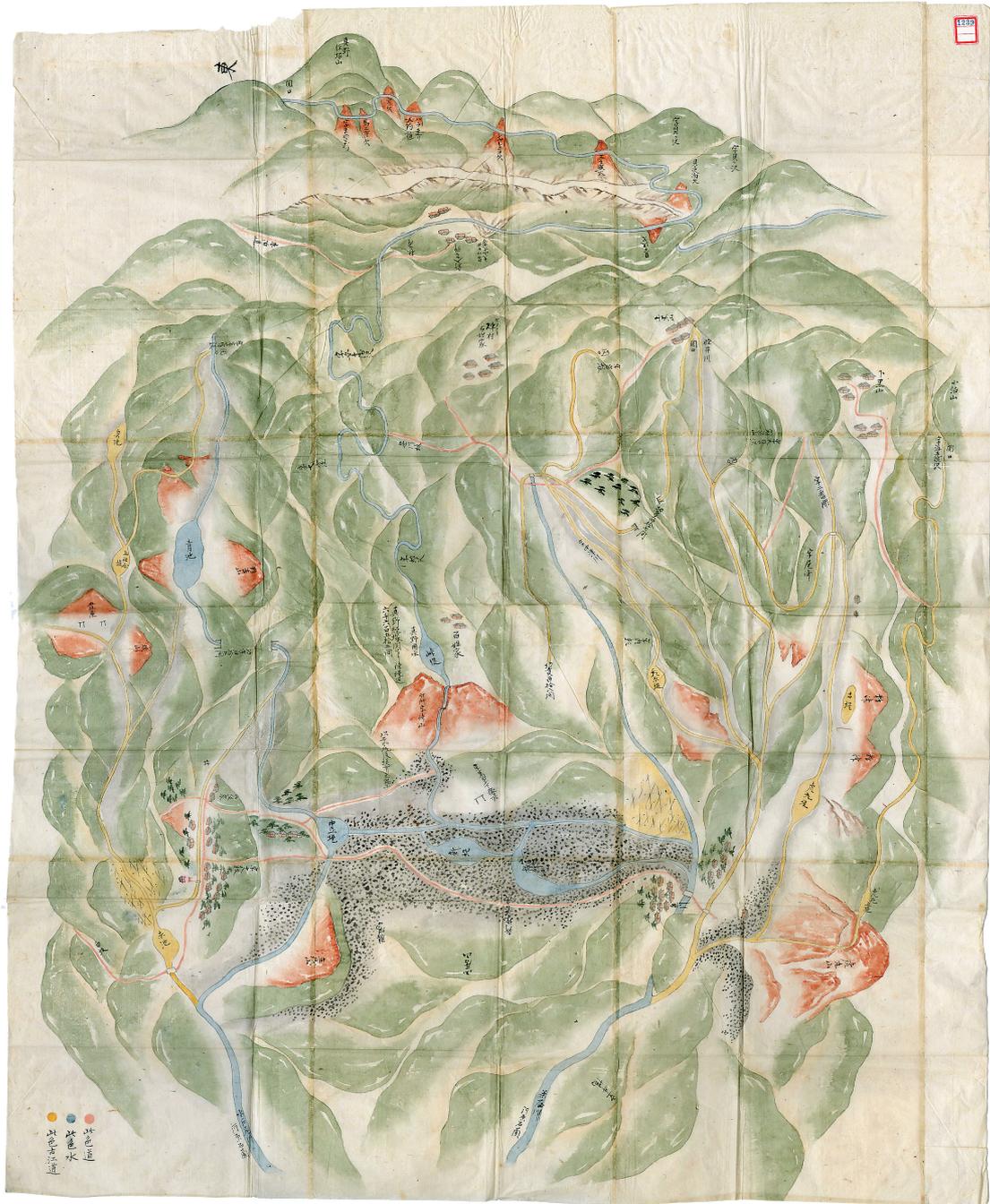


## 關連資料

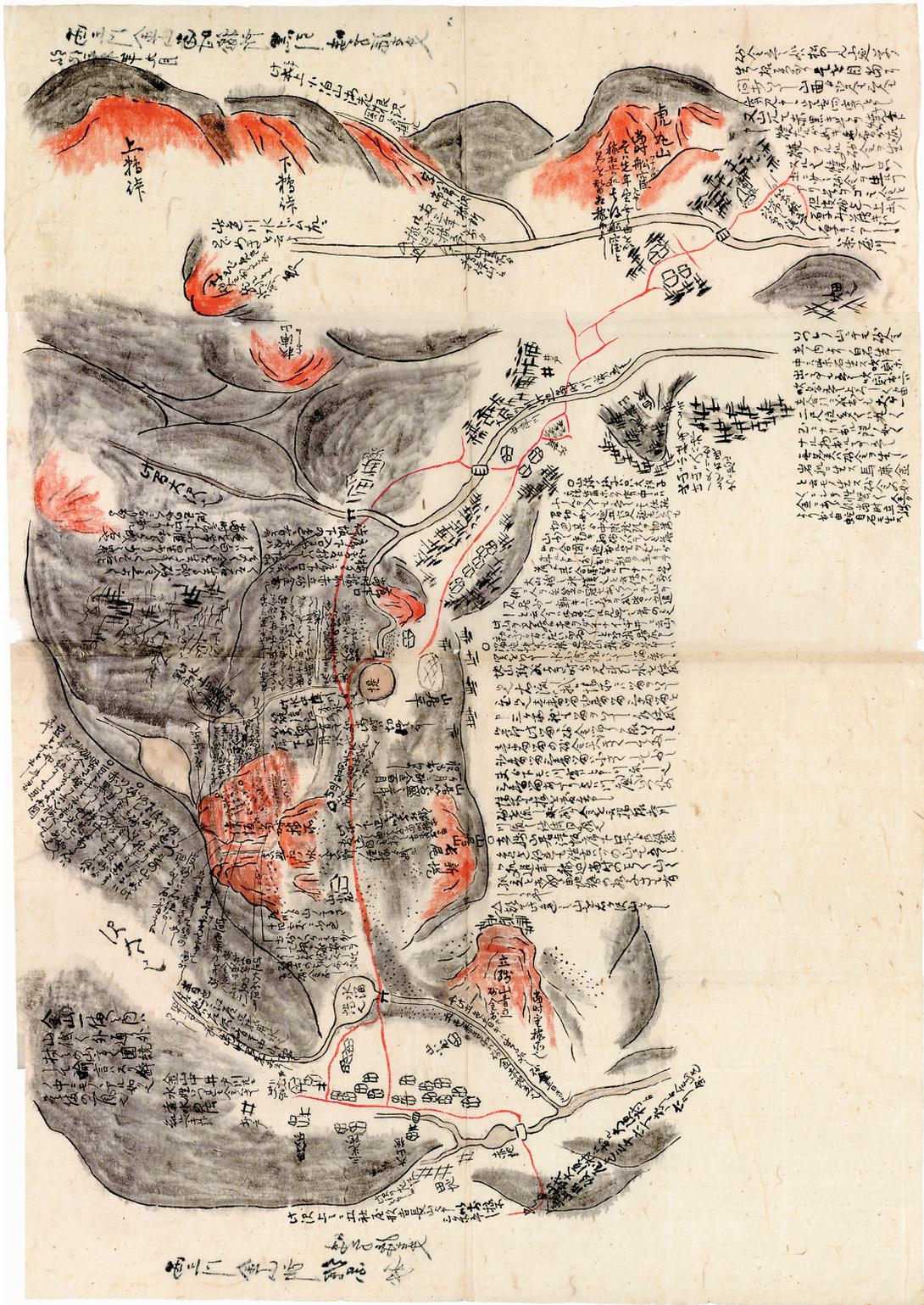




第 27 図 「西三川砂金山全図」

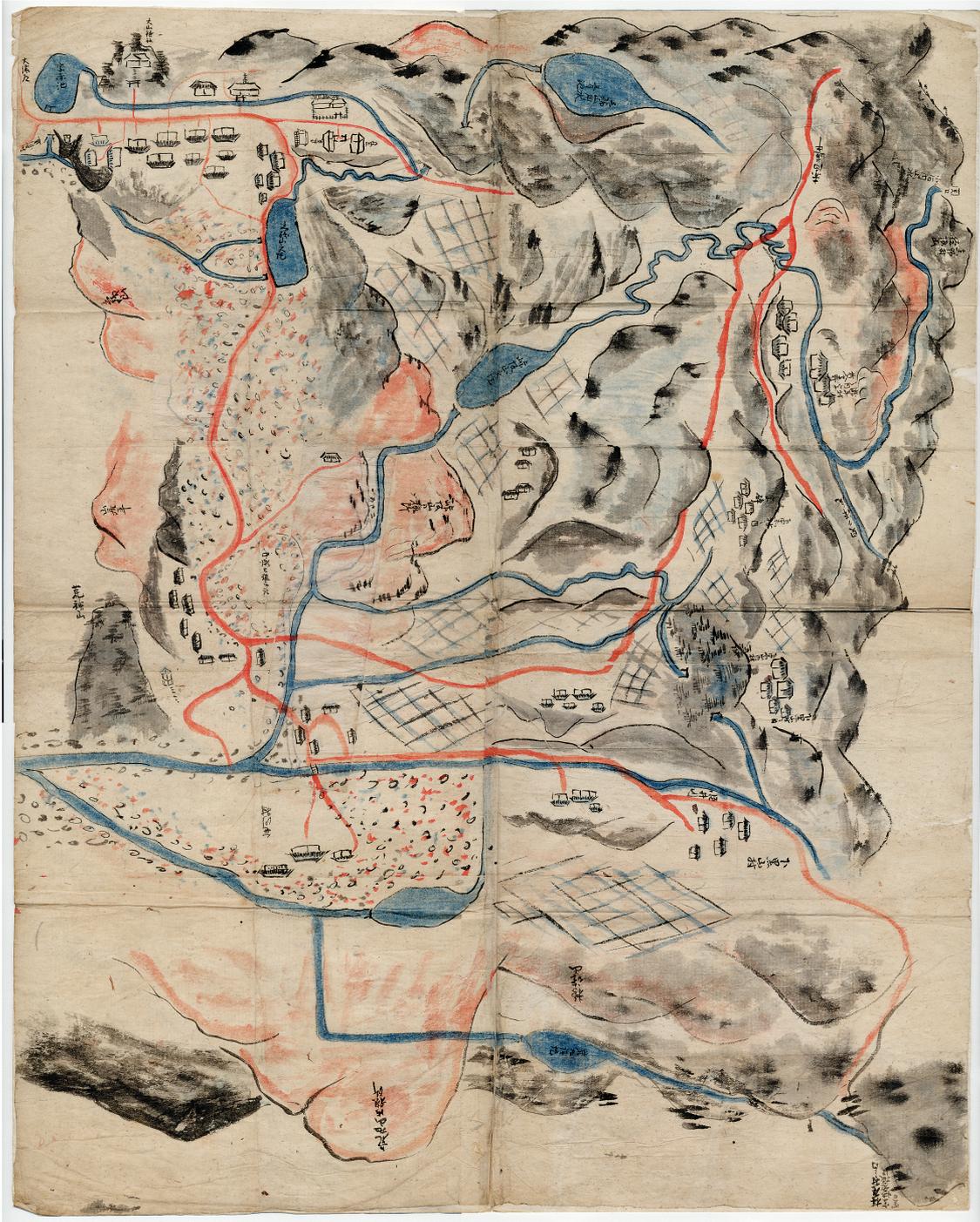
[舟崎文庫]





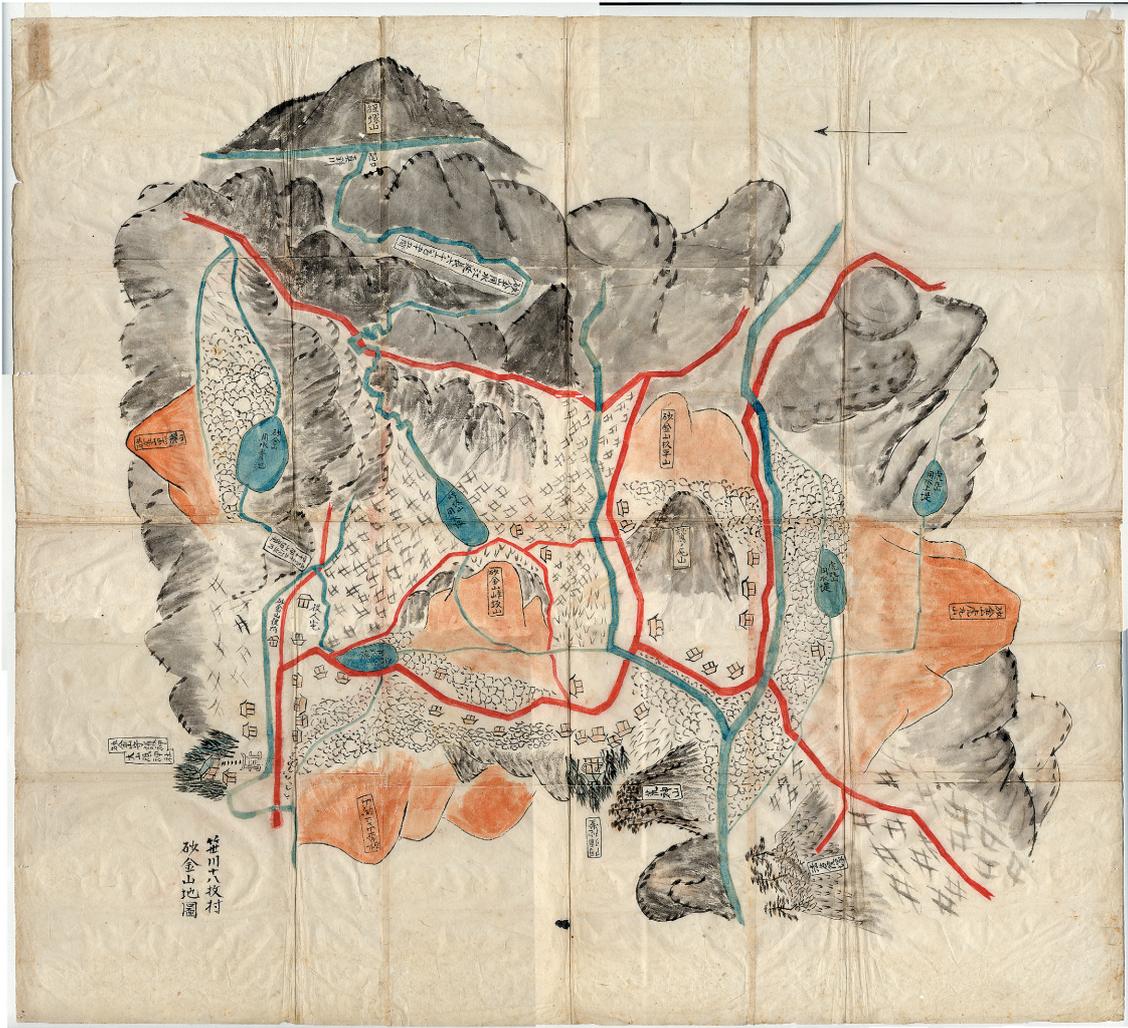
第 29 図 「西三川金山当時稼所墨引」

[味方家寄託資料]



第 30 図 「笹川十八枚村砂金山絵図」

[金子勘三郎家文書]



第 31 図 「菅川十八枚村砂金山地圖」

[金子勘三郎家文書]

瀬取明其外所々堅固に水引方等御普請御入用積  
三千九百四貫三百九十文御金蔵御除金之内より  
御渡相成候様木品は定式御林木御断之内にて遣  
合候旨伺出書面六月四日阿部伊勢守殿へ進達九  
月廿五日何之通可取計旨御指図有之

『佐渡年代記』（嘉永三「一八五〇」）

#### 史料十四

嘉永三年金山又不景氣ヲ訴へ立残山峠坂山ノ山腹ナ  
ル大石及ヒ川裾ナル柄山ヲ除キ字中瀬ヲ採掘センコ  
トヲ申請シタルモ当時奉行所ハ財政豊ナラスシテ其  
ノ費用全部ヲ給スルコト能ハス要所ハ稼人等ヲシテ  
私費ヲ投シテ之ヲ実行セシメタルニ去一ヶ年分採拾  
高三百五匁（約百七十七匁）ニシテ工事費四十  
三兩ヲ差引キ尚七十七兩餘ノ利益を得三十年來未曾  
有ノコトナリキト云フ

「鑛山 地方鑛山 西三川」砂金山（嘉永三年「一八五〇」）  
『佐渡國史』

#### 史料十五

「嘉永四辛亥年」

一 西三川砂金山取明場所去ル戌年申上御普請取掛  
り稼方為相励候處同年分砂金五百目程之山柄に  
相成に付右之内二百目程は定例之通焼金に仕立  
三百目は正砂金にて上納仕度旨伺書三月廿四日  
松平伊賀守殿へ進達五月廿三日砂金五百目は迄  
之通焼金に仕立御蔵納取計候様可致旨被仰渡

『佐渡年代記』（嘉永四年「一八五一」）

#### 史料十六

嘉永四年ニ至リ去年幕府へ申請セシ工事（立残山及水年進  
等ノ費用積三千九百四貫三百九十文）許可セラレテ之ニ着手シ奨励シタリシ  
カハ今年分ノ砂金ハ五百目以上ニ至レリ

「鑛山 地方鑛山 西三川」砂金山（嘉永四年「一八五一」）  
『佐渡國史』

一新筑後堤 長二十五間 但幅八間  
但深さ一丈

此堤江筑後水・峠水・青池水溜置稼所え相用  
る申候、筑後堤より新筑後堤迄江道百拾間有  
之内拾間打貫有之

同所

一 中平山堤 長七間 但幅六間  
但深サ七尺

此堤江道水上無之筑後江道洩水並十五番  
川筋通り水請込相用る申候、堤頭より  
百四十五間上二而江道二掛り申候

是ハ當時中平山と申名目無之、中柄山打込  
相稼候二付中柄山二而相用る、右山所水渡  
通柄山流し送候節相用る申候

一 十五番川堤 長拾五間 但幅五間 深九尺

此水則十五番川筋之水也右水上は軽井川二  
御座候

一 上虎丸山堤 長八間 但幅五間 深サ五尺

是は下黒山村字海老ヶ沢関口より堤頭迄江  
道長式千式拾五間

一 下虎丸山堤 長八間 但幅深右同断

是ハ笹川十八枚村字落合関口より堤頭迄江  
道長式百間

是ハ上稼所土砂流し落し此用水二而流し仕  
候

一 杉平堤 長八間 但幅五間 深サ五尺

是ハ瀧平村之内字岩塚関口より堤頭迄江道

長千六百式拾間有之内七ヶ所釣樋有之

一 鶉峠山堤 長拾間 但幅三間 深サ五尺

是ハ瀧平村之内字上黒山村軽井川下割留よ  
り堤頭迄江道長千三百七間有之

但し右用水ニテ仕付候下黒山村田地之内六  
町餘分有之候間、田干魃之節用水引取候旨田  
子之者共願出候二付相糾し候處、寶永六子年

かなこ共より取置候披露文其外差出候二付、  
相川御役所へ申候處、田子のもの共願通御  
聞濟有之旨、銀山掛廣間役より達有之

一 成由山堤 長拾八間 但幅三間 深九尺

是ハ江道筋渡手村之内字鷹葛沢関口より成  
由澤迄千式百有之、但字さらゝより堤頭迄  
式百四拾五間有之

但五社屋山當時御休山二付右用水芳ヶ澤ノ  
水モ成由山江溜二掛り申候

一 大須村三貫目沢堤 長三拾間 但幅平均八間  
深サ五尺

是ハ右川筋之水ニ而水上モ三貫目沢ト申候、  
但右川筋二大須村田地有之苗生之節ハ濁水  
田地え差入難儀趣之相願候二付、苗正之内  
は稼無之候

右堤並江道間數御役所御好之時々繩引相改申二  
付、以前よりの書物とは少々違ひ有之

此外青池長六拾間但幅拾八間深サ不知  
此青池古より妖怪之事有之旨申傳

〔第六節 砂金山史 五、堤及び江道〕『西三川村誌』

史料十一

文化十二年近來出鉞甚々少ク景氣尤宜シカラス  
去秋ヨリ二千四貫平試堀ヲナセシニ砂金脈モ見  
ユル由ニテ三月水野奉行巡視シ立残山南北柄山  
ヲ除キ川床地盤ヲ掘リ土居瀨下ロシスルコトニ  
定メ金二十兩ヲ投シテ起工セリ

〔鑛山 地方鑛山 西三川〕砂金山（文化十二年「一八一五」）  
『佐渡國史』

史料十二

〔文政六癸未年〕

一 西三川金山の内字虎丸立残山取明普請有之

『佐渡年代記』（文政六年「一八一三」）

史料十三

〔嘉永三庚戌年〕

一 西三川砂金山近年内續不景氣にて取上ヶ相劣候  
に付稼所字立残山峠坂山腰通大石取片付川裾  
山取除并字中瀬と申所古來盛穿致候地山嵩有之  
に付取明候は、相應出方永續可致旨其筋之者共  
申立候へ共御入用多分に付右申立大石并川裾柄  
山と取除要用之ヶ所相撰手限入用を以手當為致  
候處便宜相成既に去ル一ヶ年分取揚ヶ三百五  
匁餘に相成此小判積百廿兩餘と取揚入用四十三  
兩餘御益に相成此外普請中柄山流佛別段御入用  
不相掛九十目餘取揚候分前分三百目餘打合上  
納可仕右之高に相成候は、三十年來之取揚高  
にて右試普請様子にて相分り引續立残山并中

史料九

(年代不詳 天明五年「一七八五」以降カ)  
中柄山

一 峠堤長式拾五間 但 中四間半  
但 深サ老間半

此江道筋真野村之内字経塚山関口より峠堤  
まで間数六千六百五拾五間有之

同所

一 筑後堤 長式拾六間 但 中八間半  
但 深サ丈式尺

此江道筋瀧平村之内字上黒山軽井川関口よ  
り筑後堤迄間数千七百九拾七間有之之内下  
黒山村御林下二山切貫候て水無廊下四拾五  
間之所水相掛候尤稼所之内二水吐無之笹川  
十五番川へ水為吐候二付山切貫無廊下四拾  
五間之間水通シ申候

虎丸山之内

一 中平山堤長七間 但 中六間  
但 深七尺

此堤一休水上無御座候拾間半頭に筑後堤有  
之候二付漏水を請返申候

一 同堤長拾五間 但 中六間  
但 深七尺

此八十五番川より分水仕候江道長百三拾五  
間有之

一 立残山堤長拾五間 但 中三間  
但 深六尺

此江道筋青池関口より立残堤迄間数五百式  
拾五間有之内四拾五間八山切貫水通し申候

一 成由山堤長拾五間 但 中五間半  
但 深五尺

此江道筋泷手村之内字鷹菅沢関口より成由  
山堤迄間数千式百間

一 鶴峠山堤長拾間 但 中三間  
但 深五尺

此江道筋軽井川之下大ぬた三ツ合関口より  
堤迄千三百七間

一 杉平山

是八当時金砂薄く仕当二相かけ申候二付平  
川流仕候

一 沢山堤長五間

此江道筋小立村之内泥ノ木沢関口より沢山  
堤迄間数式百三拾間

一 十五番川并茶屋川

是ハ全体平川流場所二御座候

一 水戸尻川并大沢河

是ハ全体平川流場所二御座候

外

青池長六拾間 但 中拾八間  
但 深不知

〔當時相用候稼所堤并江道間数之事〕『金子勘三郎家文書』

史料十

(年代不詳 天明五年「一七八五」以降カ)  
中柄山

一 筑後堤 長十五間 但 幅八間  
但 深九尺

関口瀧平村之内字上黒山軽井川より堤頭迄江  
道千七百九十七間但堤頭より下黒山村御林字  
しくせき腰切貫廊下口迄千二百五間同所廊下  
四拾五間右廊下口より瀧平村字軽井川関口迄  
六百二十七間

同所

一 峠堤 長三十間 但 幅十間  
但 深さ二丈

関口真野村之内経塚より堤頭迄江道長  
六千六百五十五間  
但堤頭より泷手村法師坂下迄二千三百四十五  
間、同所法師坂下より瀧平村字貝ヶ澤迄  
二千二百十間、貝ヶ澤より水上真野村経塚関  
口迄二千九十八間

中柄山

一 立残山堤 長十五間 但 幅三間  
但 深さ六尺

此江道筋青池関口より立残山堤迄間数五百二  
十五間有之内四十五間は切貫水通り申候

中柄山 是は當時立残山御休山に付中柄山に而相用  
申候

分より相極申候、右御取明御入用左之通り

元伺高式拾貫八百八拾文

一 錢拾九貫五百四十七文 人足賃

元伺高堤樋蓋御入用三貫文

一 錢貳貫九百四拾文

式口

式拾貳貫四百八拾七文 正御入用

伺高と差引

壹貫三百八拾九文 減相成立候分

右鶴峠山不景氣に付御休山に仕度段かな

こ共願書差出候二付、古藤十左衛門持參、

九月三日銀山掛り仙田八太夫え差出候處

願之通御聞届有之候段同人より達し有之

一ヶ月請負高 川穿に而一ヶ月三匁づつ之請負也

一 砂金三匁 根笹平 かなこ式丁廿日

是八天明三年九月迄大須三貫目沢相稼候

處、不景氣二付御免御願、右場所へ立替被仰

付、十月分より請負通り取揚候積り虎丸山打

込稼に相成末三月より

右同断

一 同六匁 水戸尻 かなこ四丁五日

是八右同断成由山不景氣二付右場所へ同

断

是八未六月より稼相止右山へ替山相願

右同断 川々札穿

一 同三匁 元鶴峠山 かなこ三丁

是八天明六年十月砂金山大口山相稼度

段相願、被仰付相稼候處不景氣二付相止、

同七末年二月川々札穿相願、同三月分よ

り書面請負通被仰付有之

一ヶ年請負高

一 同七拾貳匁 古山 かなこ四丁五日

是八水戸尻川不景氣二付右場所え立替御

普請入用として錢拾七貫文被下置、未六

月廿八日より八月廿五日迄二テ皆出来、

代銀貳貫文拜借、未九月より一ヶ月二付

七百文宛返納

外札穿之者取揚有之

〔第六節 砂金山史 四、砂金採掘の場所〕『西三川村誌』

### 史料七

〔天明五年乙巳年〕

一 西三川砂金山稼所中平山中柄山立残山三ヶ所と

もいつ頃より稼初し哉年曆も知れ兼る程之場諸

故段々稼盡し此儘二而は退轉に可及哉二付替山

二も可成場所所有之哉とかなこ共を尋し處字虎丸

山鶴崎山杉平山成由山四ヶ所之外是迄之稼所中

平山柄山之前通り柄山取片付江道普請有之ハ砂

金山相續し村方渡世にも可成段申立る二付場所

見分之上御入用錢四百貳拾壹貫文余相掛る積り

然る處西三川御普請之時ハ前々来り二而近郷拾

九ヶ村え高掛人足をふれ出す處砂金山ハ田畑少

キ村柄二付地元二而普請を引受老若男女とも相

### 史料八

働らき相應之賃錢を取二おゐてハ入用不錢右村  
え落込潤助二相成拾ヶ村高掛り人足相止組合村  
方も難儀不致双方勝手二可相成筋二付穿鑿御入  
用之内を以普請取掛りし趣江戸表えも申上置  
『佐渡年代記』(天明五年「一七八五」)

天明五年金児等建議シテ曰フ「現今の稼所なる  
中平中柄立残の三山は創始の年曆も知れざる場  
所にて漸次掘り盡したる故替山となるへき處を  
探尋せしに虎丸鶴峠杉平成田の四山の外従來の  
中平中柄二山の全面を整理し水道を改築せは事  
業を継続し得て地元村民の營業をも補助し得へ  
し」ト是二於テ根岸奉行以下之ヲ視察シタル上  
費用錢四百二十一貫文ヲ支出シ工事ヲ起スコ  
ト、ス而シテ前例ニ依レハ其ノ工夫ハ近郷  
十九ヶ村今ノ西三川村全部及真野羽茂二村ノ各  
一部ナリヨリ徵発スルコトナレトモ地元ナル笹  
川村ハ田畑少クシテ産業モ乏シケレハ全村ニテ  
此ノ工事ヲ請負ハシメハ一村經濟上便利ナルヘ  
シトテ他村高掛人夫ヲハ停止スルコト、セリ  
〔鑛山 地方鑛山 西三川〕砂金山(天明五年「一七八五」)  
『佐渡國史』

願方と差引

四百五文 減二相成候分

外

錢貳拾貫文 御拝借錢

是ハ辰十月より七月迄十ヶ月二割合返納済

一ヶ月御請負高 倉谷村地

一 砂金六拾五匁 中柄山 かなこ拾貳丁半

是ハ中柄中平両山不景氣二付、両山打込中柄山

境切貫中柄山水渡穿中平山へ附替以前相稼候

跡、柄山取除稼残候盤肌之金砂相稼度旨相願、

天明五巳年三月二日より御普請取掛、四月七日

迄二出来、尤中平山ト申名目は相止中柄山と唱

申候、御普請御入用左之通

右山所山崩有之蔵田友太夫見分之上右悪荷流拂候

内は、午九月份より一ヶ月三拾八匁之請負に相成

候

願高百貳拾貳貫九百六拾文 人足一人五拾九文宛

の積り

一 錢百拾三貫貳百六拾壹文 人足賃賃錢

願高と差引

九貫六百五拾一文 減二相成候分

外

錢百拾三貫目 御拝借錢

是ハ巳五月より一ヶ月三百文宛返納

一ヶ月御請負高 小立村地

一 砂金拾匁 成由山 かなこ四丁と五日

是ハ立残山不景氣に付右場所に立替相願、願

之通仰付天明五巳年三月廿三日より御普請取

掛り、四月十日迄に而皆出来、御入用左之通

願高貳拾貳貫拾文 人足壹人五拾九文宛之積り

一 錢九貫四拾八文 人足賃錢

願高と差引

貳貫四百五拾八文 減に相成候分

外

錢拾五貫文 御拝借錢

是ハ巳五月より午七月迄一ヶ月壹貫文宛

返納済

此山所不景氣に付願之上九月水戸尻え立替被

仰付

一ヶ月御請負高 西三川村地

一 砂金九匁 虎丸山 かなこ四丁

是ハ天明五巳年四月十五日より御取明

御普請取掛り五月七日迄皆出来、御請

負高は十月份より相極申候、御入用左

之通

此山不景氣に付蔵田友太夫出役之節吟味之

上、一ヶ月七匁五分宛之請負に相極、未八

月份より拾五匁の受負

元何高三拾五貫七十七文 此人足五百七十

八人分

一 錢三拾壹貫五百四十八文

元何高堤樋蓋樹入用錢六貫文

一 錢五貫五百七十八文 但上下兩稼

所式返り分

二口ノ 三拾七貫百三十文 正御入用

伺高と差引

三貫九百四拾七文 減相立候分

此山所根笹平かなこ打込稼相願人足賃貳拾

七貫六拾五文被下置、未六月廿八日より八

月拾五日迄に皆出来、一ヶ月砂金拾五文宛

之請負外拾四貫文拝借、未九月より一ヶ月

九百三拾文づつ返納

一ヶ月御請負高 西三川村

一 砂金五匁 杉平山 かなこ四丁

是ハ天明五巳年五月十一日より御取明御普請取

掛り六月九日皆出来、御請負高は十月份より相

極申候

右御普請御入用は左之通り

元何書六拾一貫七百六拾三文 此人足千五人

一 錢五拾八貫四百六拾四文 人足賃錢

元何書高釣樋木品並堤樋蓋入用五貫百文

一 錢四貫八百三拾六文

二口ノ 六拾三貫三百四文 正御入用

伺高と差引

三貫五百五拾九文 減相立候分

此山所不景氣にて願之上申柄山へ人数打込稼に相

成末年より御休山

一ヶ月請負高 高崎村地

一 砂金四匁 鵜峠山 かなこ三丁

是ハ天明巳年六月十八日より御取明御普請取

掛り、七月七日迄に而皆出来、請負高は十月

茶屋川

茶屋川尻より杉平水戸尻迄千七百七拾壹間

杉平山

杉平山水戸尻より堤下迄貳百六拾間

杉平堤

長八間幅五間深サ五尺

堤頭より 岩塚関口迄千六百貳拾間

立残山

水戸尻より堤下迄貳百七拾間

立残堤

長拾五間幅八間深サ七尺

立残堤頭より青池尻迄五百貳拾五間

青池

長六拾間幅拾八間深サ不知

中柄山

水戸尻より筑後堤下迄四百貳拾三間

筑後堤

長拾五間幅八間深サ九尺

筑後堤より

峠堤下迄千八百七拾七間

峠堤

長三拾間幅拾間深サ壹丈壹尺

峠堤より 真野経塚関口迄千六百拾三間

間

史料五

〔第六節 砂金山史 五、堤及び江道〕『西三川村誌』

風土記ニ左ノ如ク記シタリ延享ヨリ寛延頃ノ稼所ノ模様ナルヘシ記事簡單ニシテ要領ヲ得難キモ當時ノ概況ヲ想像シ得ヘカラン

山 影平 虎丸 中柄山 中立 五社屋

杉平 筑後 立残

流 大川 十五番 茶屋 割留 五挺樋

水戸 両開

堤 青池 五社 峠 筑後 杉平 影平

虎丸 赤池 中立

〔鑛山 地方鑛山 西三川砂金山〕(延享ノ寛延年間 〔一七四四ノ五一〕『佐渡國史』)

史料六

(天明四ノ六年〔一七八四ノ八六〕カ)

(註)此の書は天明四年より六年までの間に書かれたものと見える。

倉谷村地

一ヶ月御請負高 中柄山 かなこ拾三丁

倉谷村地

一 砂金七拾目

右同断 中平山 同七丁

一 同三拾式匁五分

此の式ケ所天明五巳年二月迄川稼候處両山共不景氣に付両山境通り柄山取除打込稼仕度断相願、願通被仰付有之

小立村

同 一 砂金拾五匁五分 立残山 同四丁

是ハ不景氣ニ付天明五巳年成由山へ立替り相願、願通被仰付有之當時御休山

倉谷村

一ヶ月御請負高

一 砂金三拾四匁 上中柄山 かなこ四丁半

是ハ右同断ニ付天明四辰年十五番川へ立替り相願右願通被仰付有之當時御休山

右同断

一 砂金四匁 茶屋川 受 清次郎

是ハ天明五巳年三月より稼相止當時札穿場所ニ相成被在申候

右同断 小立村

一 砂金九匁 水上山 小立村 仁三郎

是ハ右同断當時御休山 沢山 當村 九兵衛

一ヶ月御請負高 大須村

是ハ天明四辰年十月人足貳百七拾人拝借錢貳拾貫文被仰付、十一月廿七日出来右御普請中田上戸牛次・高木與一郎出役、跡掛り丸田彌一右衛門被仰付巳年三月十一日御免、森庄兵衛被仰付午年三月廿五日御免、掛跡り砂金役兩人へ被仰付

此稼所不景氣ニ付願之上御免笹平へ立替被仰付一ヶ月御請負高 西三川村地

一、砂金拾三匁 十五番川 かなこ四丁

是ハ上中柄山不景氣ニ付右場所へ立替相願天明四辰年九月十五日より御普請取掛り同月晦日皆出来御普請御入用左之通

- 一 青池 長六拾間 深サ不知  
幅拾八間
- 一 同千百拾八間  
是者笹川坂頭より赤泊道法師坂下迄
- 一 同七百七拾九間 内 三拾壹間新入高野林之内伏樋  
九拾間字早稲田樋所有
- 一 是者法師坂より新入高野迄
- 一 同千四百三拾壹間 内 拾貳間大掛樋  
拾五間つり
- 一 是者新入高野より貝ヶ沢迄  
拾壹間字赤欠掛樋  
九間字しやち内二掛樋  
拾壹間字大釣樋
- 一 同式千九拾八間 内 貳拾壹間字大欠掛樋  
三間字馬ノ背欠  
拾八間字豆閉掛樋  
九拾間経塚関口より白欠迄伏樋
- 一 是者貝ヶ沢より真野経塚関口迄
- 一 同百七拾壹間  
是者中柄山より中平稼所水戸十五番川迄
- 一 同百拾五間  
是者十五番川通り間数  
右之通御座候以上  
寛保元年酉七月改  
是者相川左門町山主和田与太郎方二有之  
萬年元申年閏三月写之取  
〔砂金山御稼所堤江道間数寛〕『金子勘三郎家文書』
- 一 中柄山  
一 間数三百拾八間 内七拾五間稼所  
是者中柄山水戸尻より稼頭迄
- 一 同百五間  
是者中柄山稼頭より筑後堤下迄
- 一 筑後堤 長拾五間 深サ九尺  
幅八間
- 一 間数七百五拾間  
是者筑後堤より笹川坂下迄
- 一 同三百七拾三間  
是者笹川坂下より切貫口迄
- 一 同四拾七間  
是者切貫之内
- 一 同六百貳拾七間  
是者切貫口より軽井川関口迄
- 一 同三拾五間  
是者中柄山稼頭より瀧ノ下迄
- 一 同四拾五間  
是者瀧頭より峠堤下迄
- 一 峠堤 長三拾間 深サ壹丈壹尺  
幅拾間
- 一 間数千貳百貳拾九間  
是者峠堤より笹川坂頭迄

史料四

此の外同書には寛保元年酉七月改め、砂金山御稼所堤江道間数（相川左門町山主和田與太郎所蔵萬延元年閏三月写之と有）を載せてあるが、それによると

- 水戸尻川 茶屋川よう赤池堤迄間数九百八拾四間
- 赤池堤 長式拾間幅拾五間深サ八尺
- 赤池頭より 五社屋稼所水戸尻青池尻三ツ合迄川通り三百四拾五間
- 五社屋水戸尻より五社屋堤下まで貳百五拾三間
- 五社屋堤 長拾五間幅八間深さ五尺
- 五社屋稼所より奥堤江下迄八拾貳間
- 奥堤 長四拾間幅拾貳間深サ四尺
- 奥堤江下より 高菅沼関口迄七拾三間
- 虎丸山 虎丸山稼所より虎丸山堤下迄百五拾七間
- 虎丸山堤 長拾貳間幅六間半深サ九尺
- 虎丸山堤 頭より鶴峠山古堤頭迄九拾貳間
- 鶴峠古堤 長拾壹間幅六間
- 鶴峠古堤より 虎丸山上堤迄千六百九拾間
- 虎丸山上堤 長八間幅貳間半深サ五尺
- 上堤頭より 海老根沢関口迄貳千貳拾五間

- 是者赤池頭より五社屋稼所水戸尻青池尻三ツ合迄川通り
- 五社屋山  
一 間數百五間  
是者五社屋水戸尻より取明所迄
- 一 同七拾五間  
是者五社屋稼所之間
- 一 同七拾三間  
是者五社屋稼頭より堤下迄
- 一 五社屋堤 長拾五間 深サ五尺 幅八間
- 一 間數百八拾貳間  
是者五社屋稼頭より奥堤江下迄
- 一 奥堤 長四拾間 深サ四尺 幅拾貳間
- 一 間數四百七拾三間内 二間之所つり 五間之所釣樋 二間半掛樋
- 是者奥堤江下より高菅沢関口迄
- 虎丸山  
一 間數八拾九間  
是者虎丸山稼所水戸之内
- 一 同六拾八間  
是者同所水戸頭より堤下迄
- 一 虎丸山堤 長拾貳間 深サ九尺 幅六間半
- 一 間數百九拾貳間  
是者堤頭より鶴峠山古堤頭迄
- 一 鶴峠古堤 長拾壹間 幅六間
- 一 間數四百八拾八間 内三間之掛樋有  
是者鶴峠古堤より二番関迄
- 一 同三百壹間  
是者二番関より下黒山尾崎迄
- 一 同七百六拾四間  
是者尾崎より輕井川之下大のた沢関口迄
- 一 同百四拾六間  
是者虎丸山上上稼所より上堤下迄
- 一 虎丸山上堤 長八間 深サ五尺 幅貳間半
- 一 間數貳百七拾七間  
是者上堤頭より切貫口迄
- 一 同拾八間  
是者切貫之内伏樋有
- 一 同千百七拾間  
是者切貫頭より海老根坂橋迄
- 一 同五百六拾間  
是者橋渡より海老根沢関口迄
- 茶屋川  
一 間數九百三拾壹間  
是者茶屋川尻三ツ合より十五番川三ツ合迄
- 一 同拾五間
- 是者十五番川三ツ合より虎丸山水戸尻迄
- 一 同貳百貳拾五間  
是者虎丸山水戸尻より杉平山水戸尻迄
- 杉平山  
一 間數貳百六拾間 内九拾貳間稼所  
是者杉平山水戸尻より堤下迄
- 一 杉平堤 長八間 深サ五尺 幅五間
- 一 間數貳百八拾五間  
是者堤頭より中津川迄
- 一 同五百貳拾五間  
是者中津川より檉沢迄
- 一 同八百拾間  
是者檉沢より岩塚関口迄
- 立残山  
一 間數貳百七拾間 内四拾間稼所  
是者立残水戸尻より堤下迄
- 一 立残堤 長拾五間 深サ七尺 幅八間
- 一 間數貳百八拾七間  
是者立残堤頭より切貫口迄
- 一 同四拾五間  
是者切貫之内
- 一 同百九拾三間  
是者切貫口より青池尻迄

# 文献資料

## 史料一

立残山 影平山 五挺樋 五社屋山  
 下黒山村割留沢 同屋敷澤 田切須村両開 西三川  
 村高仙  
 外砂金有之村々  
 背合川 河茂川 大野白土山  
 柿野浦黄金山 渋手上野 二見から川  
 此六ヶ所砂金出候宛有之金山之 もの試候由

〔金山之内古稼跡〕『金子勘三郎家文書』

## 史料二

一 立残山 是八天明五巳年二月迄稼有之但中立とも云  
 一 影平山 是八杉平領分二候得其他村之者相稼候二付名目附相稼候よし  
 一 五挺樋 是ハ札穿之者折々流し致し申候  
 下黒山  
 一 割留澤 是は野田澤とも云以前川茂村彌三右衛門と申者相稼候よし  
 同  
 一 屋敷澤 是は砂色よしと申傳  
 西三川之内  
 一 諏訪坂 是は相稼候年曆等相知れ不申、田地用水に而相稼候体に相見え申候西三

川源六と申者屋敷也

同

一 高仙平 是は右同断海老ヶ澤の用水路御座候  
 小比叡地  
 一 笹淵山 是は上通りに金砂有之候に付流切地盤出て稼場所無之体用水は金山川筋之水掛る

小立村

一 水上山 是は両山共同場所にて上通り金砂有之取候よし以前は大盛り有之よし  
 一 澤山  
 西三川村  
 一 牛場山 是は年曆等相知れ不申至而往古相稼候体に御座候海老ヶ澤の用水路跡有之  
 大倉谷村  
 一 大がけ山 是は以前より申傳有之天明五巳年敷穿三問いたし御様流し有之候處、漸砂金五分ならで揚り不申候、其後かなこ共打稼候へ共一向仁當に合不申相止

大須村地

一 五社屋山 是は鷹菅芳ヶ澤之水に而相稼、以前は盛得候よし申傳候

椿尾村地

一 鴨ヶ澤 是は西三川高崎村之者相稼候よし、砂金揚り高不相知

小泊村地

一 長やち 是は砂金揚り高宜由金山かなこ申傳、當時甚之亟屋敷主次衛と申者相稼候由此長谷地天明六年九月一三日蔵田友太夫出役之節罷越試穿致候處砂金無之

〔第六節 砂金山史 四、砂金採掘の場所 金山之内古稼跡〕

〔西三川村誌〕

## 史料三

(寛保元年「一七四一」七月)  
 水戸尻川  
 一 間数三百三拾五間 是者茶屋川尻三ツ合より五挺樋迄  
 一 同五百六拾間 是者五挺樋より水戸尻川稼頭迄  
 一 同八拾九間 是者水戸尻稼頭より赤池堤下迄  
 一 赤池堤 長式拾間 深サ八尺 幅拾五間  
 一 間数三百四拾五間